

氏名	黒木 秀房
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第444号
学位授与年月日	2017年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	ジル・ドゥルーズの哲学と芸術 —ノヴァ・フィグラ—
審査委員	(主査) 澤田 直 江川 隆男 (立教大学大学院現代心理学研究科教授) 宇野 邦一 (立教大学名誉教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

序論 哲学的表現の問題

第Ⅰ部 哲学と芸術をつなぐもの	第1章 「翻訳」の問題
	第2章 倫理論
第Ⅱ部 エチカとフィギュール	第3章 イメージの問題
	第4章 フィギュールとは何か
	第5章 主体化のプロセス
第Ⅲ部 フィギュールの共同体	第6章 「来るべき民衆」の政治性
	第7章 創造の共同体

結論 新たな思考のフィギュール

参考文献

仏文要約

### (2) 論文の内容要旨

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ (1925-1995) における哲学と芸術の関係を、形象／文彩という二重の意味をもつ〈フィギュール〉という言葉に着目して読み解くことで、二つの領域の関係を検討し、両者の関係に包括的な視点を与えようとする研究である。

序論「哲学的表現の問題」で極めて明確な形で問題構成が説明された後、第1章「「翻訳」の問題」では、芸術に対面する際にドゥルーズが用いる方法論的側面が「翻訳論」として整理・提示される。第2章「倫理論」では、哲学と芸術に共通する場として倫理という問題構成が明らかにされる。第3章「イメージの問題」では、イメージ論を中心に、思想史のうちでの位置づけが行われる。第4章「フィギュールとは何か」では、近接概念との相違点を検討することで、ドゥルーズにおける「フィギュール」の特異性が浮き彫りにされる。第5章「主体化のプロセス」では、倫理的側面の射程を検討することで、フィギュールが美学と倫理の蝶番となることが指摘される。第6章「「来るべき民衆」の政治性」では、フィギュールという主題が共同体の問題とどのように連結されうるのかが分析される。最後の第7章「創造の共同体」では、ベルクソンに由来する「仮構作用 (fabulation)」を参照しつつ、政治的地平における「フィギュール」の効果が剔出される。こうして、哲学と芸術が共闘することの意義を解明することを通じて、ドゥルーズのスタイルの探求が、「フィギュール」に結実していることが示唆される。

以上、3部7章の考察を通して、これまで主題的な検討が十分に行われてきたとは言い難いドゥルーズにおける哲学と芸術の関係の実相が明らかにされるとともに、倫理的側面との関係についても多くの示唆が提示された。

## II. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文は、これまでジル・ドゥルーズ研究において、主題的に扱われることの少なかった哲学と芸術の関係の重要性に着目し、ドゥルーズ哲学において文学論や芸術論が果たす役割とその射程を多角的に検討するものである。とりわけドゥルーズ作品の随所に散見しながらも明確な形で定義されてきたとは言い難い「フィギュール」という語の意義と使用法を精査することで、一見無関係に見える作品群に通底する〈形象・文彩〉としてのフィギュールという語の概念を明確化しようと試みている。この哲学者がプルーストやカフカといった作家、フランシス・ベーコンなどの画家、また映画を論じた浩瀚な二巻本の『シネマ』によって芸術にきわめて高い関心を寄せ、それらを論じてきたことは周知の事実であるし、個々の書物に関しては研究も進められてきたが、それらを貫通する問題系と哲学者の思想の内実に関しては明確な形で論じられてきたとは言い難い。本論文はドゥルーズ研究だけでなく、20世紀フランス哲学研究におけるこの欠落を埋めんとする重要な試みである。

### (2) 論文の評価

黒木秀房氏の論文は、哲学と芸術の接点というきわめてスケールの大きい課題に果敢に挑戦し、これまでイマージュの問題として大まかに語られてきた問題系をフィギュールという相の下で読解することで、新たな照明をあて、包括的な読解を可能にするものと言える。さらに、哲学と芸術の関係だけではなく、倫理を出発点として、政治や共同体といった問題構成との接続が試みられる点でも射程の広さを感じさせる。3部7章の考察を通して、ドゥルーズ哲学と芸術を結ぶ重要な主題が網羅的に検討・分析されており、この問題に関してきわめて充実した鳥瞰図が提示されている点は高く評価できよう。その一方で、総花的なだけに、各テーマの分析に関しては展開不足なこともときにあり、今後さらなる深化の必要があることが審査委員から指摘された。とはいえ、フィギュールという斬新な切り口によって、ドゥルーズの芸術論と哲学全般に対して明確なヴィジョンを与えたことは明らかであり、今後の発展が大いに期待できる論文である点で審査委員の意見は一致した。

近年のドゥルーズ研究はある時期の特定の作品に特化した個別研究が多いが、それだけでは、哲学者の思想のダイナミズムを捉えることは難しい。フィギュール、イマージュ、図式、ダイアグラム、仮構作用といった、隣接しながらも微妙に異なる概念を丁寧に腑分けすることで、ドゥルーズの芸術論の根底にある関心を抉り出す試みは、近年にない貴重な成果であり、高く評価できる。